上品な老婦人

札幌市医師会
新札幌パウロ病院
高階（たかしな）　俊光（としみつ）

もう何年も前に友人から聞いた話です。回診時に認知症の老婦人の患者さんが毎日「ドンドンパンパンドンパンパン・・・」のドンパン節と口にできない北海道の２つの方言を歌調にして手拍子をしながら歌っており、とても良い響きで遠くからでもよく聞こえたそうです。認知症の患者さんは新規記憶定着障害がありますが、昔のことはよく覚えています。この患者さんが入院した時、褥瘡がなかったのですが、寝たきりの状態になったため皮膚剥離のごく小さい褥瘡が形成されてしまいました。それからというもの、ご家族が何かにつけてクレームをつけてきたのです。介護側はご家族が来院するたびに黙ってお聞きして‘すみません’の連発です。ご家族の姿を見たらもう戦々恐々の状態だったそうです。

たまたま‘その口にできない言葉’を歌っている時にご家族がお見舞いに来たのです。それを聞いてそれはそれはビックリしたのでしょう。そしてとてもとても恥ずかしかったのでしょう。それまでのいつもの剣幕はどこへやらで、低姿勢の低い声で「母は大人しい上品な人だったんです」と繰り返し弁解してきました。「母はもの静かな人でこんな人ではなかったのです。こんな病気になって病気がそうさせているのです。母は日本一言葉の汚いところで生まれ育ったものですからこんな恥ずかしい歌を歌って申し訳ありません。とても恥ずかしいです」日本で一番言葉の汚いところ？お母さんの出身地はというと、それは何と私の祖母と同郷だったのです。そういえば祖母は自宅で無尽か何かの会合が終わった後に、20人以上の人たちが壁を背にして並び、ドンパン節を手拍子よろしく歌っていたのを祖母の膝の上で聞いていたものです。

祖母の方言ですぐ思い出すのは、カラッポヤミ（怠け者）、カシャッペナイ（大したことない）、マツコ（お正月のお年玉）、宝モン（大バカ者）・・・などなど。宝もんという方言は、相手に「宝もん」と言って私はスッキリ、言われたこの方言の意味を知らない相手は褒められたと思って喜んでいる、自分も満足、相手も満足という便利な方言です。しかし私にとってこの方言が体に染み込んでいるので、宝もんと言われるとどんな罵った言葉よりショックを受ける言葉でもあります。

またこんな話も聞きました。某国立大学のあるクラブでは、北海道方言を知らない本州からの新入生に老婦人が口走っていた２つの方言を使って‘〇饅頭’と‘〇飴’をデパートに買わせに行かせる伝統があり、そして後日の飲み会の席でその報告会をするという習わしがあったそうです。デパートに行きその方言を使った饅頭と飴をくださいというと、若い女性の店員さんは沈黙し顔を赤らめたり、困惑して上司に相談に行き、上司が奥から出てきて新入生にその意味を説明されたとか、中には当デパートでは扱っていませんが全国展開している老舗の某デパートで扱っていますので、そちらに行かれはいかがですかと言われたり・・・。そしてみんなでその報告を聞いて腹を抱えて笑いこげ合うのだそうです。

居酒屋のカウンターで関西の友達と飲んでいて、方言の話になり、友達が大きな声でその言ってはいけない方言を連発し、カウンター越しのマスターがけげんな顔をしていたのには閉口しました。北海道に限らず、とっても口にできない方言というものがそれぞれの土地にあるかと思います。

話を元に戻しますと、褥瘡が良くなったこともあってそれ以来ご家族からのクレームがピタリとなくなったそうです。日常の診療に当たって、私たち医療者はとても受け身の立場で頭を悩ますことがたくさんありますが、その中の大きなもやもやしたことを解決することは嬉しいことです。方言に助けられ友人はとても安堵していました。

北海道は明治初期より日本の各地から移住してきた人の集りで、いろいろな方言の宝庫といえるかもしれません。日常的に標準語と思ってひょんなことから口に出ることがあるかと思います。ご用心！ご用心！